賭けと人生

賭けと人生

ちくま文学の森 10

筑摩書房

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

賭けと人生〈ちくま文学の森10〉

一九八八年七月二十九日　第一刷発行

編　者　安野光雅（あんの・みつまさ）
森毅（もり・つよし）
井上ひさし（いのうえ・ひさし）
池内紀（いけうち・おさむ）

発行者　関根栄郷

発行所　株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二―八　〒一〇一―九一
電話東京二九一―七六五一（営業）
二九四―六七一一（編集）
振替口座東京六―四一二三

装　本　安野光雅
印刷所　三松堂印刷
製本所　鈴木製本所

本書の定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

©M. ANNO T. MORI H. INOUE O. IKEUCHI
1988 Printed in Japan

ISBN4-480-10110-1　C0393

全生涯（ぜんしょうがい）……リンゲルナッツ　板倉鞆音訳……2
賭博者（とばくしゃ）……モルナール　徳永康元訳……5
ナイフ……カターエフ　小野協一訳……13
その名も高き
キャラヴェラス郡の跳（と）び蛙（がえる）……マーク・トウェイン　野崎孝訳……31
富久（とみきゅう）……桂文楽演……45
紋三郎（もんざぶろう）の秀（ひで）……子母沢寛……65
かけ……チェーホフ　原卓也訳……83

混成賭博クラブでのめぐり会い……アポリネール　窪田般弥訳……97
アフリカでの私……ボンテンペルリ　柏熊達生訳……105
黒い手帳……久生十蘭……119
スペードの女王……プーシキン　神西清訳……151
木馬を駆る少年……D・H・ロレンス　矢野浩三郎訳……195
五万ドル……ヘミングウェイ　鮎川信夫訳……225
塩百姓……獅子文六……271
闘鶏……今東光……287

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

死人に口なし……シュニッツラー　岩淵達治訳……361
もう一度……ゴールズワージー　増谷外世嗣訳……393
哲人パーカー・アダスン……ビアス　西川正身訳……407
最後の一句……森　鷗外……421
喪神……五味康祐……439
入れ札……菊池　寛……461
賭けについて　解説にかえて……森　毅……480

賭けと人生

全生涯

リンゲルナッツ
板倉鞆音訳

——覚えていらっしゃる？
夕方、かげろうの妻がたずねた
——階段の上であの頃あなたのチーズのかけらを盗んだのを
老人らしい明るさでかげろうの夫が言った
——ええ、覚えていますよ
そして彼は微笑した——昔々のこと
——覚えていらっしゃる？　彼女は更にたずねた
——私があのころ第六番目の膝したに

あの重い敗血症を患ったのを

——そうだったかな　夫は半ば夢み心地で言った

——覚えていらっしゃる？　あなたを恨んで
私が蠅取紙自殺をしかけたのを
それから私が最初の卵を産んだのを
覚えていらっしゃる？　あれが五時半だったのを
それから私がミルクのなかへ落ちたのを

かげろうの夫はもう何も答えなかった
疲れてひくく独りごちた
——遠いとおい昔のこと——遠い——

賭博者（とばくしゃ）

モルナール

徳永康元訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

モルナール・フェレンツ　Molnár Ferenc
一八七八―一九五二　ハンガリーのブダペストに生まれる。父はユダヤ系の医者。ジュネーヴ遊学後、新聞記者になり、かたわら市井のエピソードに材をとったユーモラスな小品、短篇を発表。ブダペストの下町を舞台にした戯曲「リリオム」の大成功により、国際的な人気作家となった。ナチス政権の樹立にともないアメリカに亡命、ニューヨークで客死。多くの長・短篇、風俗劇のほか、少年小説「パール街の少年たち」がある。「賭博者」は初期のコント風作品。
（原題　A játékos）

この話の主人公は、早死にした私の親しい友人である。私たちは、若いころの何年かをいっしょにすごした仲だったのだ。

友人は芸術家だった。画家であり、彫刻家であり、建築家でもあった。すばらしい才能をもった情熱家で、天才のひらめきがある男だった。

私たちが毎日のようにつきあっていた時分、友人はカルタに夢中だった。カルタ仲間の集まるところなら、新聞記者クラブだろうが、カフェー・オステンドだろうが、モンテカルロだろうが、どこでも彼は常連だった。

彼は放胆で、しかも幸運な賭博者だった。私はよく、一晩じゅう隣の椅子にだまってすわったまま、彼の大胆な作戦や、ときには薄気味わるいほどのするどい勘に感嘆したものだ。真に天才的な賭博者たちの例にたがわず、彼は、たとえ始めの十五分間は負けていても、ひとたび運をつかんだとなると、一晩じゅうけっしてその幸運を手放さないのだった。

ある日、友人は私を訪ねて来て、二、三日いっしょにヴィーンへ旅行しないかとさそった。もうだいぶ前から、彼は胃の具合がわるいとこぼしていたのだ。

「今ぼくはなかなかの金持ちなんだよ。ちかごろ、ばかに勝負運がよかったもんでね」と彼は言った。

「それでヴィーンへ行って、あるプロフェッサーに診察してもらおうと思うんだ」

私たちはヴィーンへ出かけて、いっしょにO教授を訪ねた。教授は彼を診察して、いろいろと質問した。友人は私をむりに教授のところへいっしょに連れて行って、診察に立ち合わせたのだ。

この訪問の結果はかんばしいものでなかった。O教授の診断によると、胃には別に異状がないが、これからすぐに神経科の医者へ行って診察を受ける必要があるというのだった。教授は、その医者を指定して、私たちが向うへ着くまでに、電話をしておくと約束してくれた。

私たちはふたりとも、病気についてはしろうとなのだが、どうもよくない予感がした。胃がわるいというのに、医者は胃よりも膝や瞳孔の反応に関心があるらしい。——きっとこれは、なにか相当むずかしい病気なのにちがいない。

こうして私たちは神経科の医者を訪ねた。ここでも私は、診察室の中まで友人につきそってやらなくてはならなかった。彼は裸になって、型通りの検査をされた。つまり、目をつぶったまま歩きまわったり、手を上にあげて右の中指で左の中指にさわったりさせられたわけだ。

だが、そのあとの検査は、今まで私が見たこともないものだった。友人はソファーの上に腹ばいに寝かされた。すると医者はハットピンを取り出した。今どきのご婦人がたにはあまり用のないあの長いありきたりのハットピンだった。あのころの神経科の医者は、こういうハットピンで背中の神経の感覚を試したのだ。

その検査というのはこうなのだ。医者がハットピンの尖った先かまるい頭かどちらかで、そっと患者の背中にさわる。そうすると、腹ばいになっている患者は、いま自分の裸の皮膚にさわったのがピンの先なのか頭なのか、言い当てなければならないのだ。

医者はこう説明して、検査をはじめた。医者はまず、ピンの先で友人の背中にさわった。

「先」と友人は言った。

「当たり」と言って、医者はまたピンの先でさわった。

「また先だ」と友人は言った。

「おみごと」と医者は言った。――「じゃ、今度は」

「また先だ」

「すごい」

今度はピンの頭のほうでさわった。

「頭」と患者は言った。

「じゃ、今度は」

「先」

「うまい」

こういうふうに検査は続けられた。医者は十ぺんぐらいもハットピンで友人の背中にさわり、友人はそのたびに先か頭かを正確に当てたのだ。

私はほっとした。ここへ来るまでつきまとっていた不安は、これでもうさっぱりしたわけ

だ。私は上機嫌で階段をおりて往来へ出ると、さっきの胃の先生のことを何かひとこと批評してやりたくなった。そのとき友人がこう言いだしたのだ。

「ねえきみ、ぼくのからだはだいぶわるいらしいよ」

びっくりして私は彼を見つめた。

「うん、そうなんだ。ぼくの病気は相当むずかしいんだよ」と彼は言った。

「そんなことがあるもんか。あのとおり、検査はうまくいったじゃないか。そりゃ始めはぼくだって心配したさ。だけど、きみがあんなにまちがいなく当てたのを見ればね。あのハットピンのさ……」

「実はね」と、悲しげな微笑みをうかべて友人は言った。

「ぼくは、たったいっぺんだって、背中にさわったのがあのピンの先だったのか頭だったのか、まるでわかっていやしなかったのさ。医者が最初にさわったとき、ぼくはまずこう考えたんだよ。ピンで何かをためそうとする場合、誰だってまずピンの尖ったほうを考えるだろうってね。だってピンが役に立つのは先があるからこそだろう。頭のほうじゃないからね。そこで、ぼくは『先』と言ってみたら、医者のやつが『当たり』だなんてひょんなことを言うじゃないか。そのときだよ、ぼくの頭に、こいつは賭けだなという考えがひらめいたのはね。つまり、丁か半かというわけさ。ハットピンには、先か頭かという二つの場合しかないんだからね。ちょうどこれは、モンテカルロのルーレットの赤と黒と同じなんだよ。さて賭けと来れば、ぼくのお手のものさ。だいいち、このところ何週間も運のつきっぱなしと来て

るしね。そこで、二度目にピンがさわったとき、ぼくはまた『先』に賭けた。すると、医者はまた『おみごと』と言うじゃないか。こうなると、ぼくには例のぞくぞくするような興奮状態がおこって来たんだ。勝負師がきょうは運がついているぞと思ったときに味わうあの気持だよ。ぼくはまた『先』に賭けた。だが四回目になったとき、『先』はもうこれでおしまいだ。今度はそろそろ『頭』の来るころだなと感じたんだ。こうしてまたぼくはうまく当てることができたわけだ。そのあとは、いつもの法則通りに賭けたのさ。つまり、赤が続いたあとには一度黒が出て、また赤にもどるというやつだ。そして今度もうまくいった。こうやってぼくは、十ぺんぐらいの賭けを続けさまに勝ったわけさ。ちょうどルーレットの赤と黒に賭けたのと同じだよ。……これくらいの勝負なら、ぼくにとって、別にむずかしいことでも珍しいことでもないんだ。モンテカルロでは、十五へんから二十ぺんぐらいも勝ち続けたことさえあったんだからね。……だけど、もしあの医者がピンでさわっただけで何も言ってくれなかったら、ぼくはきっとすっかり迷ってしまっただろうがね」

友人のこの告白と、あのときの彼の微笑みを、私はいつまでも忘れることができないだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c